ミモシンのプロオキシダント作用 遷移金属複合体による活性酸素種の生成

村 上 惠 子¹⁾, 羽根田 みや子¹⁾, 喬 善 善 楼²⁾, 細 川 好 孝¹⁾, 吉 野 昌 孝³⁾
(¹⁾愛知医大・医・生化*, ²⁾現・中部大・生命医科学**, ³⁾金城学院大・食環境***)

Prooxidant Action of Mimosine. Metal-dependent Generation of Reactive Oxygen Species

Keiko Murakami¹⁾, Miyako Haneda¹⁾, Sian-Lou Qiao²⁾, Yoshitaka Hosokawa¹⁾ and Masataka Yoshino³⁾ *Department of Biochemistry, Aichi Medical University School of Medicine*,

²⁾Chubu Universicty School of Medical Life Science,

³⁾Kinjo-gakuen University School of Food environment

Summary

Mimosine (3-hydroxy-4-oxo-1 (4H)-pyridinealanine), a tyrosine analogue is produced by plant *Leucaena leucocephala*. Cytotoxic effects of mimosine were analyzed in relation to the generation of reactive oxygen species. 1. Treatment of glioma C6 cells with mimosine induced cell death with DNA damage and repair processes. 2. Mimosine/iron complex inactivated aconitase, the most sensitive enzyme to oxidative stress. The inactivation was dependent on sodium azide, an inhibitor of catalase, indicating that mimosine/iron complex can generate hydrogen peroxide as a principal product. 3. Mimosine stimulated the atuooxidation of Fe²⁺ suggesting that mimosine promotes the activation of dioxygen molecule by reduced iron. 4. Mimosine enhanced the Fe/ascorbate-dependent formation of 8-hydroxy-2'-deoxyguanosine in DNA, indicating generation of hydroxyl radical. Prooxidant action of mimosine may explain the cytotoxic effects of this compound including alopecia and growth retardation reported previously.

ミモシンはギンネム属の葉と種子に多く含まれるチロシンアナログである。ギンネムは薪炭あるいは木材として、また環境の緑化、土壌の生産性維持にも効果が高いとして世界各地で栽培されている。成長が早くタンパク含量が高いため家畜、家禽の飼料としても利用されるが、ミモシンは有毒であり動物に脱毛、成長阻害、不妊、甲状腺腫などの症状を来す。ミモシンがギンネムにおいて果たす役割は詳らかでないが、食害を防ぐための自衛手段と推測される1)。

動物に対するミモシンの毒性は硫酸第一鉄の添加によってある程度解除されることから鉄のキレートによる吸収阻害の可能性が示唆されていた¹⁾。事実構造の似たデフェリプロンは過剰な鉄の排泄を促進する薬剤として用いられる。しかし主な中毒症状として鉄欠乏による貧血が見られないことはミモシンの毒性が単なる吸収阻害ではないことを示す。培養細胞あるいはウィルスに対する増殖抑制の検討からミモシンはリボヌクレオチドリダクターゼの阻害²⁾,サイクリン依存性キナーゼの発現抑制³⁾.同キナーゼ阻害タ

ンパクの合成促進^{3,4)}, あるいは DNA 鎖切断⁵⁾などの効果を持つことが報告された。

鉄のキレーターはしばしば鉄による酸素分子の一電子還元反応を促進してラジカルを生成する性質を持つことが明らかになっている⁶⁻⁸⁾。本研究においてはミモシンの毒性が鉄との複合体形成による活性酸素生成とそれによるDNA 損傷に由来するとの仮説の下に,アコニターゼの失活による活性酸素生成の検出と DNA 塩基の酸化修飾を検討した。

材料と方法

1. 試薬. 実験材料

パン酵母、NADP 依存性イソクエン酸脱水素酵素 - オリエンタル酵母。ミモシン、仔牛胸腺 DNA、DNase、エンドヌクレアーゼ、アルカリホスファターゼーシグマアルドリッチ。NADP - ロシュ。コメットアッセイキット - Trevigen(Gaithersburg, MD)。

*所在地:愛知県愛知郡長久手町岩作雁又 21 (〒480-1195)

**所在地:愛知県春日井市松本町 1200 (〒487-8501)

***所在地:名古屋市守山区大森 2-1723 (〒463-8521)

2. 細胞培養

C6 グリオーマ細胞を高濃度グルコース含有ダルベッコ 修正イーグル培地に 10% 高仔ウシ血清を加え、 $5\%CO_2$ 存在下で培養した。

アポトーシスの検出 - 光学顕微鏡による形態観察とコメットアッセイによった。

コメットアッセイ – 細胞をトリプシン処理し生理食塩水にて洗浄後、アガロースに懸濁し、アルカリ溶液を加えて、15 分間 15 V にて泳動。細胞を離れた損傷 DNA を蛍光顕微鏡にて観察した 9)。

3. 透過性パン酵母の調製

市販のパン酵母を 4 倍量の $0.5 \,\mathrm{M}$ ソルビトールを含む $0.2 \,\mathrm{M}$ リン酸緩衝液(pH 7.4)に懸濁し、緩衝液と等量のトルエンを加えた。 $43 \,\mathrm{C}$ で $2 \,\mathrm{O}$ 間加温後、遠心分離によって上清を除き、4 倍量の $0.5 \,\mathrm{M}$ ソルビトールを含む $50 \,\mathrm{mM}$ トリス・塩酸緩衝液(pH 7.1)に懸濁した。これによって酵母は透過性を増しアコニターゼ活性を細胞そのまま(in situ)で測定できるようになる $\mathrm{^{10}}$ 。

4. アコニターゼの失活

10 mg/mL の透過性パン酵母を 50 μM FeSO₄, 各濃度の

ミモシン、 $0.5 \, \text{mM} \, \text{アジ化ナトリウム} \, (カタラーゼを阻害)$ を加えて $5 \, \text{分間加温後}, \, 800 \times g \, \text{にて } 5 \, \text{分間遠心し、沈殿した酵母を } 4 \, \text{倍量の } 0.5 \, \text{M} \, \text{ソルビトールを含む } 50 \, \text{mM} \, \text{トリス・塩酸緩衝液 } (\text{pH } 7.1) \, \text{に懸濁した。}$

5. アコニターゼ活性の測定

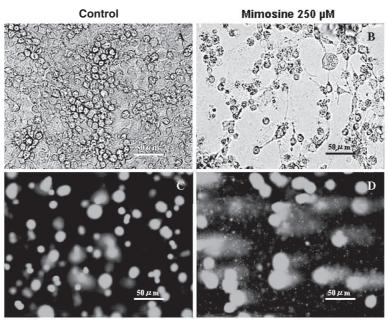
5 mM クエン酸, 0.25 mM NADP, 4 mM MgCl₂, 10 mU/mL NADP – イソクエン酸脱水素酵素, トリス・塩酸緩衝液 (pH 7.4), 1 mg/mL パン酵母存在下に 340 nm の吸光度増加を測定して算出した。

6. 二価鉄イオンの自動酸化

 $0.1 \text{ mM } \text{ on } \text{FeSO}_4$ を $10 \text{ mM } \text{ h } \text{J} \text{ x } \cdot$ 塩酸緩衝液 (pH 7.0) 中で 37 \mathbb{C} に加温し、各時間毎にマイクロプレート上でバソフェナンスロリンジスルフォン酸と反応させて、540 nm の吸光度をマイクロプレートリーダーにて測定した 11 。

7. 8-ヒドロキシ-2'-デオキシグアノシン(8-OHdG)の定量

ミモシン、0.1 mM アスコルビン酸と0.1 mM の FeCl₂ 存在下で仔牛胸腺 DNA を37^{\mathbb{C}} で1 時間加温し、DNase、エンドヌクレアーゼ、アルカリホスファターゼで処理した



A, B: Light microscope; C, D: Comet assay

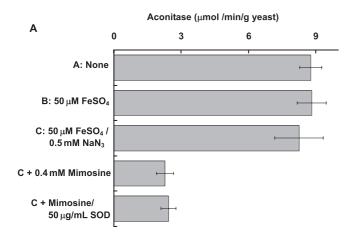
Fig. 1 Effects of mimosine on C6 glioma cells A, B. Light microscopic identification of apoptosis. Cells were cultured in high glucose-containing Dulbecco's modified Eagles's medium supplemented with 10 % fetal bovine serum, and all cells were cultured in a humidified atmosphere of 5 % CO₂/95 % air. To find out apoptosis-inducing activity of mimosine, C6 glioma cells were cultured in the absence or presence of mimosine for 24 h, then observed, and photographed. C, D. Comet assay. Comet assays were performed essentially as described previously⁹. Cells treated with mimosine were trypsinized and washed once with DMEM then with phosphate-buffered saline, then resuspended to a density of 3×10⁵ cells/mL. Aliquots of 50 μL of this solution were added to 500 μL Melt LMAgarose, and then plated 75 μL onto the provided glass microscope slides. The agarose was allowed to set at 4°C for 30 min, and the slides were then immersed in lysis solution at 4°C for 1 h to dissolve cellular proteins and lipids. After placing in alkali solution for 1 h at room temperature in the dark, the slides were immersed in 1×Tris-borate-EDTA (TBE) buffer for 5 min twice and transferred to a horizontal electrophoretic apparatus containing 1×TBE buffer for 10 min at 15 V in the dark. Slides were visualized using fluorescence microscopy(fluorescein filter). A, C: Control. B, D: 250 μM mimosine added.

後、HPLC-ECD によって 8-OHdG とデオキシグアノシンを分析定量し、その比率を算出した¹²⁾。

結 果

1. ミモシンによる細胞死の誘導

グリオーマ C6 細胞に対するミモシンの効果を Fig. 1 に示す。0.25 mM ミモシンの添加によって、光学顕微鏡レベルで細胞の変形が観察された (A, B)。またコメットアッ



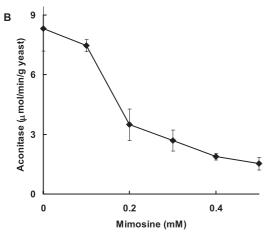


Fig. 2 Effect of mimosine/iron complex on the activity of aconitase in baker's yeast. Yeast cells were permeabilized according to the method reported previously8). Permeabilized yeast cells (10 mg/mL) were mixed with 50 µM FeSO₄, various concentrations of mimosine and 0.5 mM NaN₃ in 40 mM Tris-HCl (pH 7.1). After incubation at 37°C for 10 min, cells were collected by centrifugation at 800 $\times g$ for 5 min and suspended in 50 mM Tris-HCl (pH 7.1) containing 0.5 M sorbitol at the concentration of 200 mg/mL. Aconitase activity was determined by the coupling with NADP-isocitrate dehydrogenase, and the reaction mixture contained 5 mM citrate, 0.25 mM NADP, 4 mM MgCl₂, 10 mU/mL of NADP-isocitrate dehydrogenase and 1 mg/mL of yeast. The increase in the absorbance at 340 nm was recorded. A. Effect of mimosine on the aconitase activity in the absence and presence of NaN3 and superoxide dismutase. Concentration of mimosine was kept at 0.4 mM. B. Effect of the increasing concentrations of mimosine on the aconitase activity in the presence of 50 μM FeSO₄.

セイにより「彗星の尾」が観察された(C, D)。これは一本鎖 DNA が細胞を離れて移動したものであり、DNA の損傷と修復の過程が進行していることを示している。

2. アコニターゼの失活

次にミモシンの酵母アコニターゼに対する効果を検討した。アコニターゼは、スーパーオキシドアニオンあるいは過酸化水素の存在により、4Fe4Sの活性中心を失って失活する。パン酵母は比較的安定で高いアコニターゼ活性を持ち、トルエンで透過性を増すことによって細胞そのままで活性を測定できるので活性酸素の検出に有用である。ミモシン/二価鉄複合体は酵母アコニターゼを失活させた(Fig. 2)。失活には鉄の他にカタラーゼを阻害するアジ化ナトリウムの添加が必須であり、さらに SOD の添加によっても失活の増強を起こさないことから、生ずる活性酸素種は内在性の SOD が関与して生成した過酸化水素であることが示された(A)。失活に対するミモシンの有効濃度は 50 μ M Fe²+存在下において 0.2~0.3 mM であった(B)。

3. 2 価鉄の自動酸化促進

Fe²⁺は中性溶液中で安定であり還元状態に留まる。 0.2 mM のミモシンは二価鉄イオンの酸化を強力に促進した(Fig. 3)。しかしその酸化は二相性であり、最初の数秒で急速に進行してその後ほぼ停止した。

4. アスコルビン酸/鉄依存性 8-OHdG 生成に対する効果

ミモシン/鉄複合体によるヒドロキシルラジカルの生成を DNA 塩基の修飾物である 8-OHdG の検出によって検討した。ミモシンは鉄/アスコルビン酸による 8-OHdG 生成を最大で 4 倍に増加させた(Fig. 4)。高濃度のミモシンの添加は 8-OHdG 生成を抑制する傾向を示した。

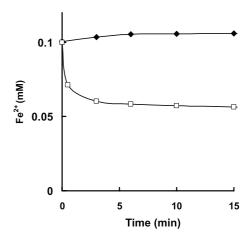


Fig. 3 Effect of mimosine on the autooxidation of Fe²⁺. FeSO₄ of 0.1 mM was incubated in 10 mM Tris-HCl (pH 7.0) at 37°C. Aliquot of 0.2 mL was mixed with 0.1 mL of 1 mM bathophenanthroline disulfonate at the indicated time and the absorbance at 540 nm was recorded by microplate reader.

 \blacklozenge , no addition; \Box , 0.2 mM mimosine added.

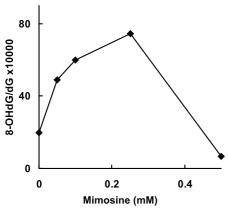


Fig. 4 Effect of mimosine on the iron-dependent formation of 8-OHdG. Calf thymus DNA was treated with 0.1 mM ascorbate, 0.1 mM FeCl₃ and various concentrations of mimosine for 1hr and 8-OHdG was determined by HPLC-ECD method as described previously¹¹). Data are expressed as mean ± SD with three independent determinations.

考察

ミモシンは鉄の強力なキレート剤として作用し、3分子のミモシンによる1原子の鉄の錯体構造が提出されている1³。ミモシン/Fe 複合体によるアコニターゼ失活にはカタラーゼを阻害するアジ化ナトリウムが必須であり、添加 SOD による失活促進効果のみられないことから、ミモシン/Fe から酸素の活性化を引き金とした過酸化水素の生成によるものと推測される。ミモシンは Fe²+と複合体を形成することにより、還元型鉄イオンの酸化を促進し、遊離した電子により酸素分子を活性化する結果、スーパーオキシドを生成する。さらにスーパーオキシドは不均化反応により過酸化水素を生成するが、この過程においては内在性のスーパーオキシドジスムターゼ(SOD)の関与とともに、ミモシン/鉄複合体は従来報告されているいくつかのキレート複合体14)と同様に不均化反応を促進するSOD 様活性にも依存すると推測される。

ミモシンの細胞毒性としてのアポトーシスが白血病由来の細胞等で報告されている^{15,16)}。本稿で示したグリオーマ細胞に対する毒性もアポトーシスと推測されるが、細胞レベルにおいて DNA の断片化、TUNEL 法などによる解析が必要である。ミモシンによる白血病細胞の U937 のアポトーシスは過酸化水素の生成によるものであると推測されている¹⁶⁾が、今回示したミモシンによる過酸化水素の生成は従来の報告に根拠を与えるものである。

またヒドロキシルラジカルに特異的な反応である 8-OHdG の生成に対する効果によりミモシンは鉄/アスコルビン酸によるヒドロキシルラジカル産生を増強することが示された。これはミモシンが Fe²⁺をキレートすることによってフェントン反応

 $Fe^{2^+} + H_2O_2 \longleftrightarrow Fe^{3^+} + \cdot OH$ を促進することを示している。添加 Fe 濃度の 3 倍以上の高濃度のミモシンで認められる 8-OHdG 生成の抑制はミ

モシン/Fe 複合体が 3:1 の比で生成する 1:3 ことによると推測される。鉄イオンは血中ではトランスフェリンに結合して Fe^{3+} の形で約 20 μ M 存在する他,細胞内ではヘム,Fe-S あるいはフェリチンに結合型した Fe^{3+} として存在する。生体内では Fe^{2+} と酸素分子との反応によるラジカル生成が実際には起きないように制御されていると考えられる。

ミモシンを含むギンネム中毒の主な症状は動物の脱毛であり、細胞死によると推測されてきた。本研究において、ミモシンは培養細胞で DNA の損傷と切断を起こすことが確認され、さらにアコニターゼの失活を用いた活性酸素検出法からミモシン/Fe²+複合体が酸素分子を活性化し、過酸化水素、ヒドロキシルラジカルを生成することを認めた。活性酸素は長期にわたる DNA 損傷によって個体の老化あるいは細胞のガン化を来たす他、多くの変性疾患に関与することが示されている 17 。一方では酸素ラジカルはアポトーシスの誘導によって細胞死を誘導する作用をも 18 。ミモシンは従来報告してきたキノリン誘導体 6 、マルトール 7 、ヒノキチオール 8 などと同様に活性酸素生成系として細胞毒性を発揮すると結論される。

参考文献

- Ter Meueln U, Struck S, Schulke E, EI-Harith EA (1979) A review on the nutritive value and toxic aspects of leuaena leucocephala. Trop Anim Prod 4: 113-126.
- 2) Dai Y, Gold B, Vishwanatha JK, Rhode SL (1994) Mimosine inhibits viral DNA systhesis through ribonucletide reductase. Virology 205: 210–216.
- Chang HC, Lee TH, Chuang LY, Yen MH, Hung WC (1999) Inhibitory effect of mimosine on proliferation of human lung cancer cells is mediated by multiple mechanisms. Cancer Lett 145: 1–8.
- 4) Wang G, Miskimins R, Miskimins WK (2000) Mimosine arrests cells in G1 by enhancing the levels of p27Kip1. Exp Cell Res 254: 64–71.
- 5) Mikhailov I, Russev G, Anachkova B (2000) Treatment of mammalian cells with mimosine generates DNA breaks. Mut Res/DNA repair 489: 299–306.
- 6) Murakami K, Haneda M, Yoshino M (2006) Prooxidant action of xanthurenic acid and quinoline compounds: Role of transition metals in the generation of reactive oxygen species and enhanced formation of 8-hydroxy-2'-deoxyguanosine in DNA. BioMetals 19: 429–435.
- 7) Murakami K, Ishida K, Watakabe K, Tsubouchi R, Haneda M, Yoshino M (2006) Prooxidant action of maltol: Role of transition metals in the generation of reactive oxygen species and enhanced formation of 8-hy droxy-2'-deoxyguanosine formation in DNA. BioMet-

- als 19: 253-257.
- 8) Murakami K, Ohara Y, Haneda M, Tsubouchi R, Yoshino M (2005) Prooxidant action of hinokitiol: Hi nokitiol-iron dependent generation of reactive oxygen species. Basic Clin Pharmacol Toxicol 97: 392–394.
- Qiao S, Li W, Tsubouchi R, Murakami K, Yoshino M (2004) Role of vanilloid receptors in the capsaicin-medi ated induction of iNOS in PC12 cells. Neurochem Res 29: 687–693.
- 10) Murakami K, Nagura H, Yoshino M (1980) Permeabilization of yeast cells: Application to study on the regulation of AMP deaminase activity in situ. Anal Biochem 105: 407–413.
- 11) Yoshino M, Murakami K (1998) Interaction of iron with polyphenolic compounds: Application to antioxidant characterization. Anal Biochem 257: 40–44.
- 12) Yoshino M, Haneda N, Naruse M, Murakami K (1999) Prooxidant activity of flavonoids: Copper-dependent strand breaks and the formation of 8-hydroxy-2'-de-

- oxyguanosine in DNA. Mol Gen Metab 68: 468-472.
- 13) Tsai WC, and Ling KH (1973) Study on the stability constant of some metal ion chelatea of mimosine and 3, 4-tihydroxypyridine. J Chin Biochem Soc 2: 70–86.
- 14) Fisher AE, Lau G, Naughton DP (2005) Lipophilic ionophore complexes as superoxide dismutase mimitics. Biochem Biophys Res Commun 329: 930–933.
- 15) Renò F, Tontini A, Burattini S, Papa S, Falcieri E, Tarzia G (1999) Mimosine induces apoptosis in the HL60 human tumor cell line. Apoptosis. 4:469–477.
- 16) Hallak M, Vazana L, Shpilberg O, Levy I, Mazar J, Nathan I (2008) A molecular mechanism for mimosineinduced apoptosis involving oxidative stress and mitochondrial activation. Apoptosis 13: 147–155.
- 17) 大柳善彦, 井上正康 (2001) 活性酸素と老化制御 共立出版, 東京:pp. 80-91.
- 18) Matés JM, Sánchez-Jiménez FM (2000) Role of reactive oxygen species in apoptosis: Implications for cancer therapy. Int J Biochem Cell Biol 32: 157–170.